不満の 地ひびき

ガタガタ、ガタガタ！

「あれまあ！　また ダンプ君が、いつもの ように ぶつぶつ 言いながら やって来たよ。ぼくは ただ 陽気に、土砂を すくう 仕事を 続けよう。」 パワーショベル君が つぶやきました。

ガタガタ、ゴトゴト、キー、ギシギシ！　ガッタン！

「やあ、ダンプ君！　元気かい？」

「フン。」　ダンプカーの ダンプ君の 返事は、それだけでした。

ダンプ君は パワーショベル君の 前まで 来ると、後ろ向きに なり、ギーッと 音を立てて 止まりました。何とも ふきげんそうな 顔です。

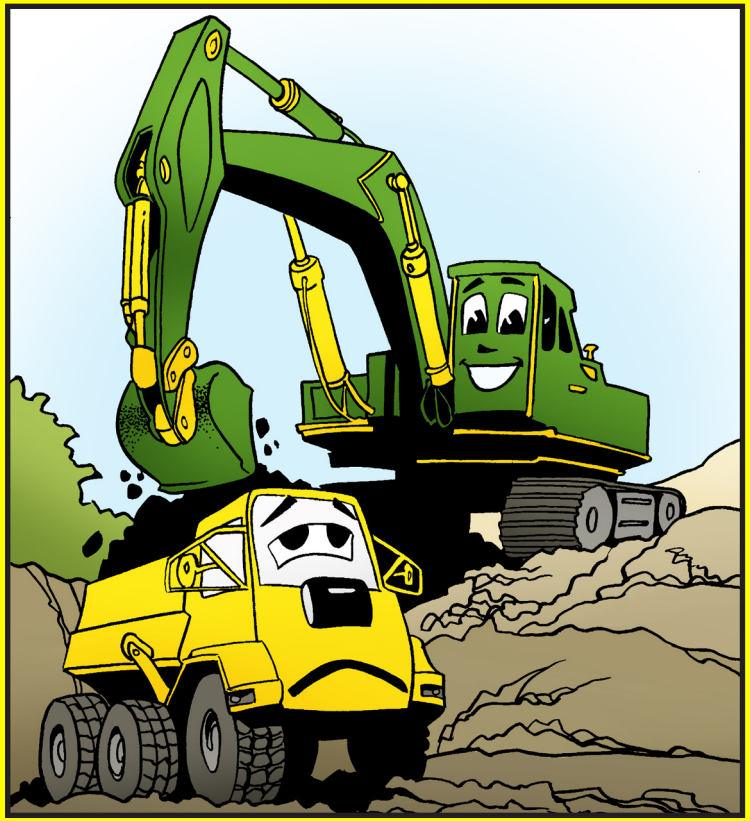
パワーショベル君は 長い アームを 地面に 下ろすと、がれきや 石や 土を いっぱい すくい上げました。それを 高く 持ち上げると、ダンプカーまで 運んで いき、荷台の 上に 下ろしました。荷台が いっぱいに なると、ダンプ君は、またもや ぶつくさ 言いながら、出て行きました。

（やれやれ。ぼくは この 仕事を せいいっぱい やってて 満足なんだけど。何かできる ことは ないかなあ？　ダンプ君も、もっと 楽しく やれると いいのに。）と、パワーショベル君は 思いました。

パワーショベル君は、次の 荷を 乗せるため、ダンプ君が もどって 来るのを しんぼう強く 待っていました。まもなく すると、ダンプ君が ガタガタゴトゴト いいながら もどって来ました。

「ラクな やつも いるものだな。」と、ダンプ君は つぶやきました。

（ぼくは 笑顔で いよう。ダンプ君の はげみに なるようにね。それに、これが ぼくの 仕事だから、どうせ やるなら 楽しく やらないと。）と、パワーショベル君は 思いました。



さて、積極思考建設会社の 監督さんは、工事が 思ったほど スムーズ かつ 効率的に進んで いない ことが 気がかりに なっていました。彼は、大きな 建設現場の わきにある 事務所で、この ちょっとした 様子を 観察していました。ここしばらくの 間、ダンプ君は タイヤを 引きずり、仕事にも やる気が 出ない 様子なのです。それで、監督さんは やって来て、ダンプ君を わきに よび出しました。

「ダンプ君、一体 どうしたんだい？　なぜ いつも、そんなに ふきげんで 悲しそうな顔を しているんだい？」と、監督さんは たずねました。

ダンプ君は ぼそぼそと 話し始めました。「来る日も 来る日も、ぼくは ショベル君の 積む 重い 荷物を 背負って 運ばなければ いけないんです。とにかく 重くて、つまらないんです。仕事は 認めて もらえないし、感謝される ことも ない。だけど、みんなは パワーショベル君を 見ると、大きくて たくましくて 力持ちだって 言います！子どもたちが 来ると、いつも 見上げて 絶賛します。それなのに、ぼくには 目もくれません。ぼくの ことは、話にも 上らないんです。

ショベル君には いいでしょう。ラクで 楽しい 仕事ばかりですから！　そこに いて、どんなに たくさん 持ち上げられるか、見せびらかせます。ぼくは ただ、ショベル君のために、行ったり来たりの めんどうで 目立たない 仕事を やるだけなのに！」

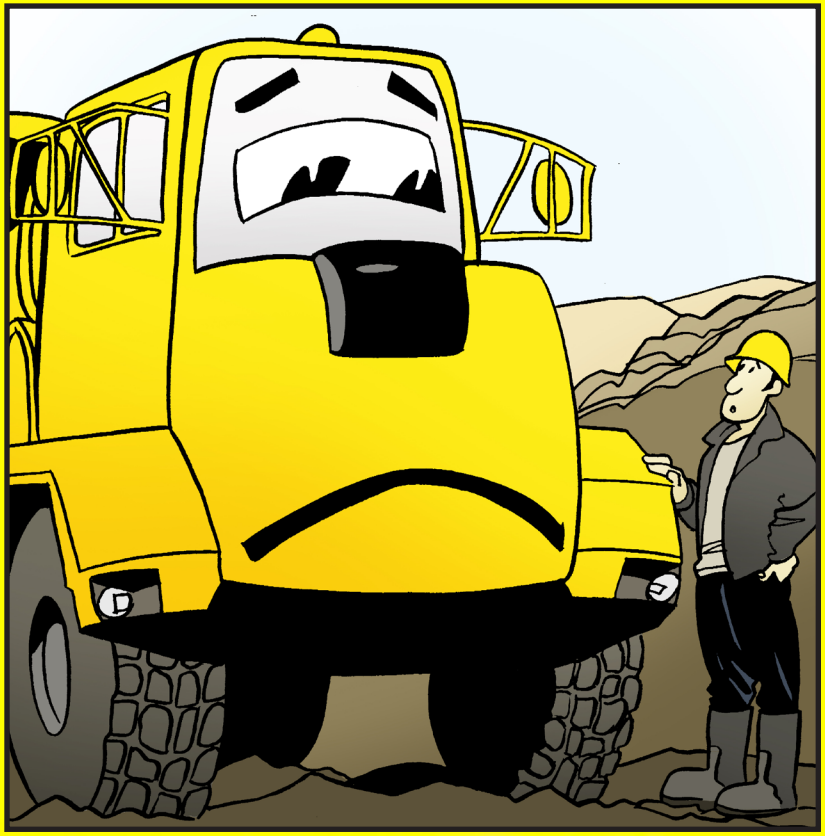
「おやまあ。これは、考えないと いけないね。」と、監督さんは 言いました。

🚌 🚌 🚌

次に 監督さんは、この 巨大な 工事現場の 反対側に 行ってみました。そこでは、いろいろな 作業が 進んでいました。押したり、持ち上げたり、つぶしたり、うめたり、掘ったり、すくったり、けずったり、大量の 土砂や 砂利やがれきや コンクリートを 片付けたり して、美しい リゾートホテル、コスタ・デル・ソルを 建設するために、土地を 整備していました。

けれども、その そうぞうしさと いそがしさの 中でも、監督さんは やはり、不満の どよめきを 感じぜずには いられませんでした。

🚌 🚌 🚌



そこでは、クレーン車の クランキー君が、きむずかしそうな 面持ちで、ゆっくりと 動いていました。ローダークレーントラックの ロリーさんが、運んで来た 建材を 持ち上げて 地面に降ろすと、クランキー君は それらの 建材をつり上げていました。

こちらでは、ロリーさんは とても 楽しそうなのに、クランキー君は とても 悲しそうでした。ロリーさんの ほうは、鼻歌を 歌い、陽気に行ったり 来たり しながら、ドアや まどなどを そうっと 持ち上げては、きちんと 積み重ねていました。

ロリーさんが 新たな 建材を 取りに 行くと、監督さんは クランキー君に、どうして そんなに悲しそうなのかと たずねました。

クランキー君は いらだたしげに 言いました。
「フン！　クレーントラックの ロリーさんは いいさ！　あちらこちらの 工場に 行ったり できるもんな。ぼくは ここに しばり付けで、上げ下げの 仕事づくめだってのにさ。彼女は ぼくが しなきゃ いけない 仕事には 目も くれず、鼻歌 歌いながら 永遠に バケーション中みたいなもんじゃ ないか。言わせて もらいますがね、これは 大変な 仕事ですよ！　ぼくの 仕事は 全然 止まらない。やっと うでを 休められるかと 思えば、彼女は まどやら 壁材やらを 持って、また やって来るんですから。」

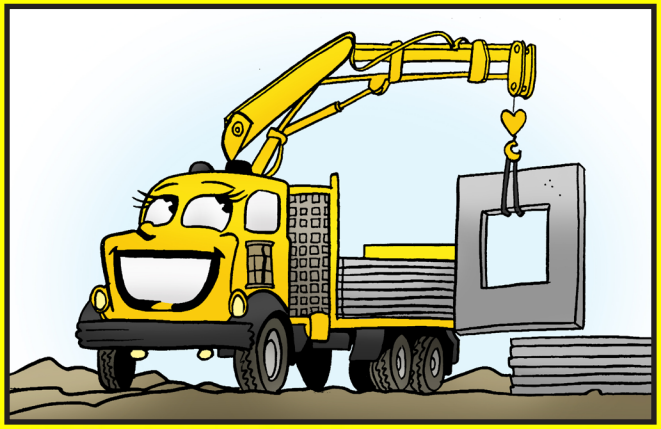
「う～む。これは、考えないと いけないね。」
しばらく 考えこんだ 後、監督さんは そう 言って、出て行きました。

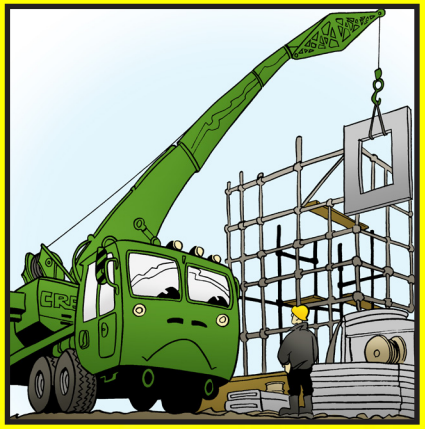
今度は、力強い ブルドーザーが 目に 入りました。彼も、ダンプ君や クランキー君ほどでは ありませんが、ちょっと 元気が ありません。何だかおつかれの 様子です。

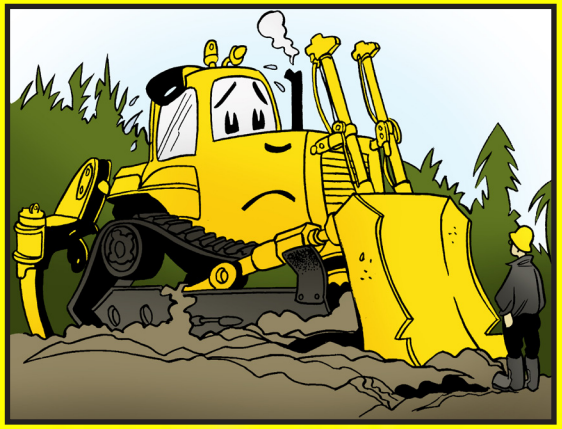
「やあ、ブルドーザー君！　調子は どうだい？」

「う～ん、まあまあです。ただ、いつも 押してばかりなんで、ちょっと つかれちゃって。ぼくは ここで 一番 大きい わけじゃ ないですよね、監督さん。スクレーパ君の ほうが、ぼくより 大きいです。だけど ぼくは、彼でさえも 押してあげなくては いけないんです！　うわさを すれば、彼が来ましたよ！」

スクレーパ君は 自信たっぷりに やって来ると、ハーハー いいながら 地面に 巨大な ツメを 食いこませました。そして かき取った 土を、背後の大きな ボウルに 積みました。１度に 処理できる量が ハンパありません。彼は ふり返って、自分の仕事が 上出来なのを ほこらしげに 見ました。それから また 大きな ひとすくいを しようとすると、ギーッと 大きな 音を 立てて、止まってしまいました。大きな 車輪が 動かなく なってしまったのです。







「ドーザー！　見えないのか？　動けなく なったんだ。早く押してくれよ！」　スクレーパ君は そう 言って、ブルドーザー君を よびました。

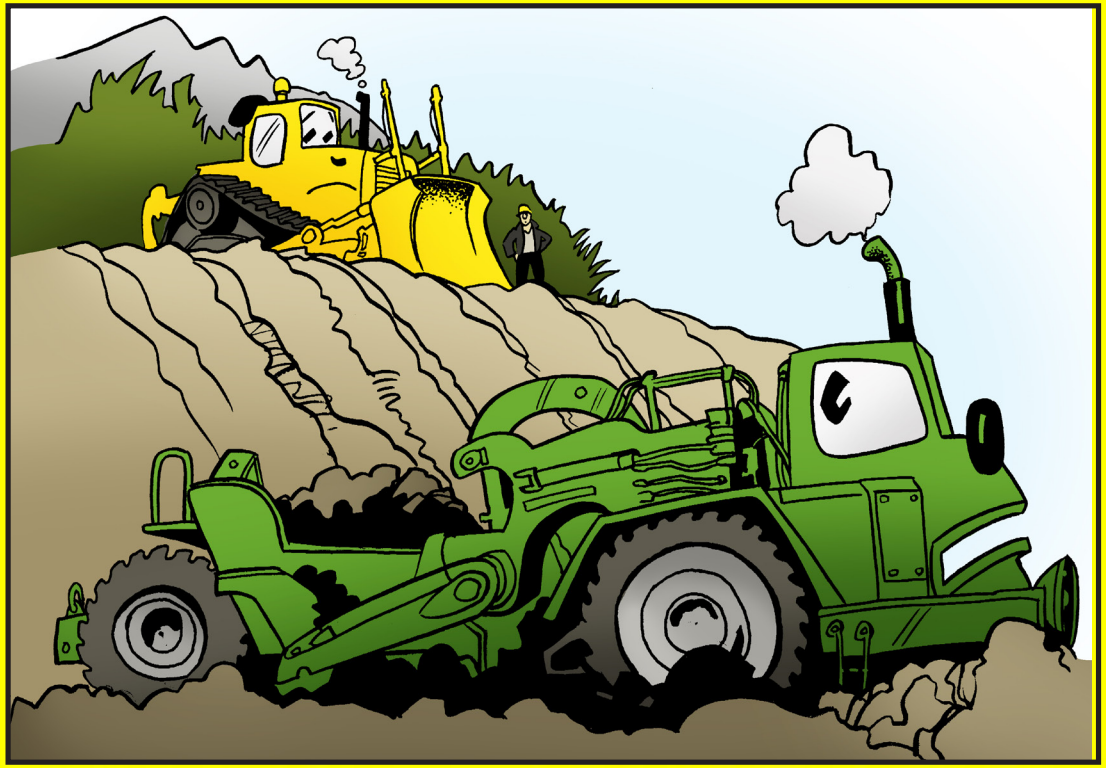
「今行くよ！」　そう 言って、ブルドーザー君は ゆっくりと斜面を 下り、スクレーパ君の 後ろに 付きました。よっこらしょっと、ブルドーザー君は スクレーパ君を 押し上げ、はまって いた がれきの 中から 出してあげました。すると スクレーパ君は、鼻を 鳴らして 行ってしまいました。

ブルドーザー君は 監督さんの 方を 見て 言いました。「ほらね。彼らは たくさんの がれきを 片付けるんだけど、ぼくが手伝わないと いけません。クレーンや スクレーパは ぼくよりも大きいけど、ぼくが 押して あげないと だめなんです。それも、１日中！　もちろん、その ほとんどは、タフで 大きな 建設車両のスクレーパ君です。彼は 押してもらうのが 好きじゃ ありません。エゴに こたえますからね！　だけど、彼の 仕事上、がれきに はまって しまうのは しょうが ないんです。ぼくは 彼が そこから ぬけ出るのを 手伝わなくちゃ いけません。ぼくには 息つく ひまも ありません！　たまには 休みたいと 思う ことも ありますよ！

ぼくは、押すのは 別に いやじゃ ないんです。ただ、感謝して もらえないんです。ぼくが 押してあげても、文句を 言われる だけなんです。だけど、すぐに 助けて あげないと、それでも文句を 言われるんですよ！　それなのに、彼らは どんなに 多くの仕事が できるかを じまんするんです。

だけど・・・。」　ブルドーザー君は 一息 つきました。自分が 他の 者たちの ことを 悪く 言っている ことに 気付き、はずかしく なったのです。「つい この間、だれかが 小声で ありがとうって 言ってくれました。ぼくの ことを 本当に 感謝してるって 言ってくれたんです。大きくて タフで 自信たっぷりの 者に とって、そんな ことを 言うのは たやすくは ないですよね。でも、とにかく そう 言って くれた おかげで、その日は いい１日になりました！」

監督さんは ブルドーザー君に、話してくれて ありがとうと 言うと、「ふ～む。このことは、考えないと いけないな。」と、ひとりごとを 言いました。そして、さらに 見回りを 続けました。やはり、足元からは、まだまだ 地ひびきが してくるのです。



今度は、小さな 掘削機の ミニショベル君の 所へ 来ました。ミニショベル君は、一人で もくもくと 働いていました。アームの 先に ついた バケットで、雨水を 流すための みぞを ほっていました。口笛を ふきながら、陽気に 働いています。でも、砂と 土の 山の 間で 一人で 働いている 様子は、どことなく さびしそうです。周りには、トラックも スクレーパも ブルドーザーも いません。一人っきりで 働いているのです。

「やあ、ミニショベル君。今日は 陽気そうだね！」

「はい、気分 上々です！」

「一人っきりで 働いていると、たまには さびしく ならないかい？」

「そうですね、監督さん。大きな トラックと いっしょに 働いたり しないのは、確かに ちょっと さびしいです。でも・・・」と、ミニショベル君は バケットを 地面に 食い こませながら、大きく ほほえんで 言いました。「みぞを ほりながら、砂の お城を 作る のが 楽しいんです。」

「砂の 城だって？　どこに・・・？　ああ、そうか。すてきな 砂の お城だね！」監督さんは、ミニショベル君が 砂を ほり起こして 積み上げた 山を 見て、彼が それを 砂の 城に 見立てている ことに 気付きました。

「ぼくは、今 学んでいる ところなんです。そのうち、他の 重機たちみたいに、本物の お城を 作るのを 手伝えるように なるでしょう。」

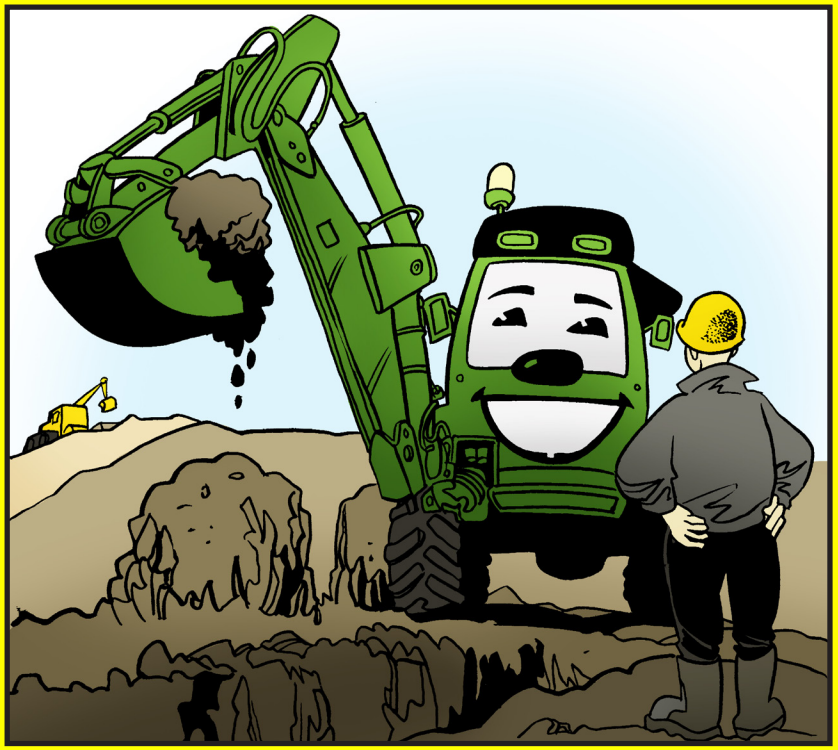
「だけどね、ミニショベル君。君は もう、本物の 城を 作るのを 手伝っているよ。雨水を 流すための みぞが なければ、建物は 洪水で 流されて しまうからね。」

監督さんは ミニショベル君に 別れを 告げ、考えこんだ 様子で、さらに 見回りを 続け ました。「このことは、考えないと いけないな・・・。そうだ！　いい ことが ある！」監督さんは、思わず 声を あげました。

「建築重機の みなさんに、お知らせが あります。」　監督事務所の 屋根の 上 高く そびえる 拡声器から、現場中に 声が ひびき渡りました。非常に 大きな 音量で 声が 割れるほど だったので、一言 話されるたびに、重機たちは している ことを 一時 中断して、耳を かたむけました。「本日の 仕事が 終わり ましたら、全員、7時に 集会 場に 集まってください。」

「おお、これは 深刻そうだぞ。」と、パワーショベル君。

「一体、何なんだ？　ぼくには 予定が あったのに。」と、ダンプ君が ぶつぶつ 言いました。



「監督さんは、おかんむりなのさ。きっと、何時間も お説教されるぞ。」と、クレーンの クランキー君。

「おしゃれしなきゃ。」と、ローダークレーン トラックの ロリーさん。

「おれもだ。だれが 来るか、分からないからな。」　スクレーパ君も、鉄鋼の フレームを 上げたり 下げたり しながら 言いました。

「ふ～ん。みんなが おくれない ためには、何台かは 押して あげないとだな。」と、ブルドーザー君が つぶやきました。

（楽しそう。みんなに 会えるんだ。）と、ミニショベル君は 思いました。

「時間に おくれないように。心配は ご無用。問題が ある わけでは ありません。」という 声が、拡声器から 流れてきました。

🚌 🚌 🚌

それでも、何のための 集まりなのか、ちょっと 不安そうな 重機たちも いました。すべての 重機車両が ガタガタと 集まって来る 中、集会場には 期待と こうふんの ふんいきが ただよっていました。

ロリーさんが 真っ先に 着きました。次に ミニショベル君。パワーショベル君と いっしょなので、うれしくて しょうが ありません。クレーンの クランキー君と ダンプ君は、ぶつぶつ 言いながら、重い 車輪を 引きずって ガタガタと 後に 続きました。最後は、ピカピカに みがきが かかった スクレーパ君です。つかれ果てて へとへとの ブルドーザー君に 押して もらいながら、入って来ました。

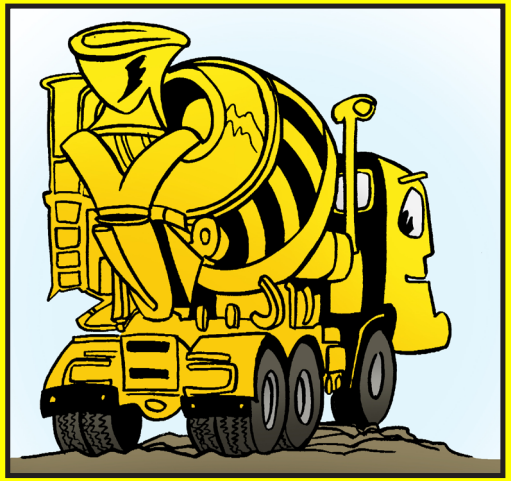
他にも、たくさんの 重機が やって来ました。コンクリートポンプ車と 太っちょ兄弟の コンクリートミキサー車、のっぽの パイルリグ君、モーターグレーダー、ロードローラーに、芸術センスの ある ガールフレンドの ロードマーカーさん、そして アスファルトフィニッシャ君。みんなが がっかりした ことには、解体ボール氏と その 息子たち、クラッシャー君と 破砕機の ブレイカー君まで 現れました。他の みんなは できるだけ 前の 良い 場所を 陣取ろうと していましたが、彼らだけは 関心なさそうに、後ろの 方で ニヤニヤしながら ぶらついていました。

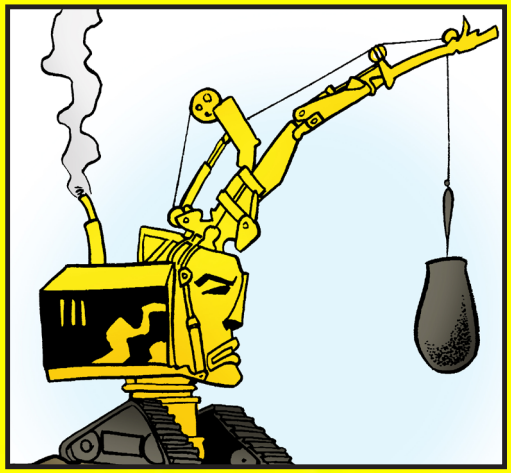
監督さんは せきばらいを すると、集まって 来た みんなに 向かって 話し始めました。「みなさん、集まってくれて ありがとう。長い 1日の 後で おつかれでしょうから、手短に 終わらせると お約束します。」

「全く、その通りだよ。」　クランキー君と ダンプ君が ぼそぼそと 言いました。

「拡声器君の 助けを 借りて、積極思考建設 会社の みなさんが、もっと 幸せで 効率的に 働けるように、改善が 必要だと 思う ことについて、お話しします。

まずは、みなさんの 働きに 対して、非常に 満足している ことを 強調したいと 思います。この プロジェクトは、みなさんの 助けなしには できません。けれども、今日 現場を 見回ってみると、どうしても 不満の どよめきが 伝わってくるのです！」





みんな、息を のみました。

「聞こえるね！」と、だれかが 言いました。

「足元で、それを 感じるよ！」と、他の 者が 言いました。

すると、監督さんは 小声に なって、ささやくように 言いました。「もし それが このまま 続くようなら、どんなに 深刻な 事態に なり得るか、分かりますよね。」

「もちろんだとも。」 スクレーパ君が 分かったように 言いました。「地中の 振動によって、せっかく 掘り起こした がれきが くずされて しまったら、おれの した 仕事は 台無しさ。」

「そうなると、それを また 運ばなくちゃ いけない ぼくの 仕事も、ものすごく 増える。今が 大変だと 思って いたら、もっと ひどい 目に あうって ことだよな。そうなると、この プロジェクトは 永遠に 終わらないよ。」と、ダンプカーの ダンプ君も 言いました。

「それだけじゃ ない。ぼくが 注意深く 設置した 壁や 窓まで、全て くずれてしまうじゃ ないか。」と、クレーンの クランキー君。

「みんなが 危険に さらされるわ！」と、クレーン トラックの ロリーさん。

「ガタガタ 言うなよ！」 ブレイカー君と クラッシャー君が 言いました。「そんなの、どうって こと ないさ。おれたちは だいじょうぶだぜ。」

「そんな ことに なったら、ぼくが 一生けん命 平らに した 道路が ひび割れだらけで 台無しに なっちゃうよ。」と、ロードローラー君。

「何てこと。せっかく きれいに 引いた 線まで、めちゃくちゃに なるわ！」と、ロードマーカーさん。

監督さんが 言いました。「みなさん。みなさんの 仕事を おくらせ、さらには もっと 大きな ダメージを 与えかねない この 地ひびきを 止めるため、それぞれが 個人的に 何が できるか、ちょっと 考えてみてください。」

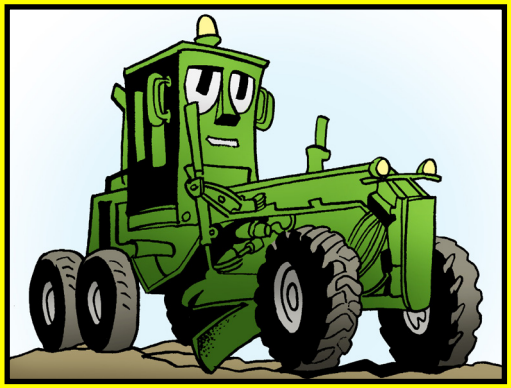
クラッシャー君と ブレイカー君の そわそわした 足音を のぞいて、建設用重機たちは みんな、シ～ンと しました。そして、最近の 自分たちの 態度に ついてや、監督さんの 警告している 最悪の 事態が 実際に 起こって しまったら どんなに 大変な ことに なって しまうか、考えていました。

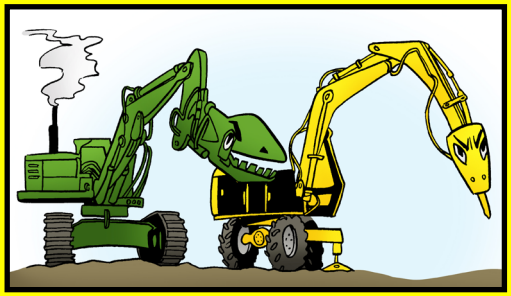
「ぶつくさ 言って、君に 悲しい 思いを させてしまって いたら、すまないね。ゆるして くれるかい？」と、ダンプ君が パワーショベル君に ささやきました。

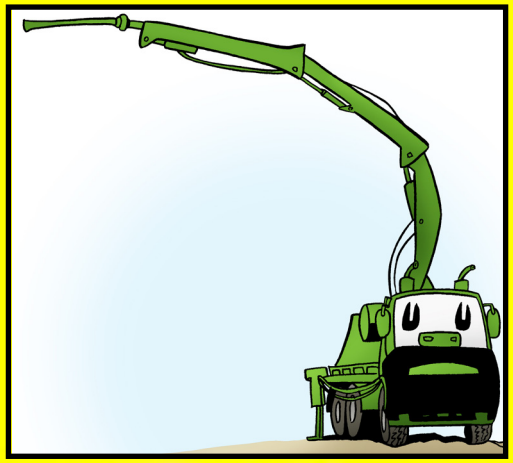
「もちろんですよ、ダンプ君。ぼくには、ダンプ君 みたいに あんな 重い 荷物を 運んで 1日中 行ったり 来たりする 力なんて、ありませんからね。ダンプ君を 本当に 感謝していますよ。」

クレーン車の クランキー君は、長い アームを クレーン トラックの ローダーさんに 回して 言いました。「いっしょに 働くのが いやな 相手だった ことを あやまるよ。自分の 状況が どんなに いいものだったか、気付かなかったんだ。」”

「いいのよ、クランキー君。わたしね、あなたが もくもくと 仕事を やっているのを 見て、本当に 感心してるの。わたしだったら、1日中 同じ 所に いたら、気が くるってしまうわ。」







「ドーザー、いつも 押してくれて、ありがとう。君が いなければ、ぼくたちは みんな、自分の仕事さえ できないもの。ぶつぶつ 言って、ごめんよ！」と、スクレーパ君。

「気に しなくて いいよ、スクレーパ君。」と、ブルドーザー君が 言いました。

🚌🚌🚌

太陽が しずみ、投光照明が いっせいに つくと、工事現場の みんなが たがいに あやまったり笑ったり おしゃべりしている 和気あいあいな情景が 映し出されました。すると、だれかが さけびました。

「消えた！」

「消えたって？　何が？」

「地ひびきだよ！　耳を すましてごらん！・・・不満の どよめきが 消えたぞ！」

「ホントだ。ぼくも、もう 感じない。地ひびきが なくなった！」と、だれかが 言いました。

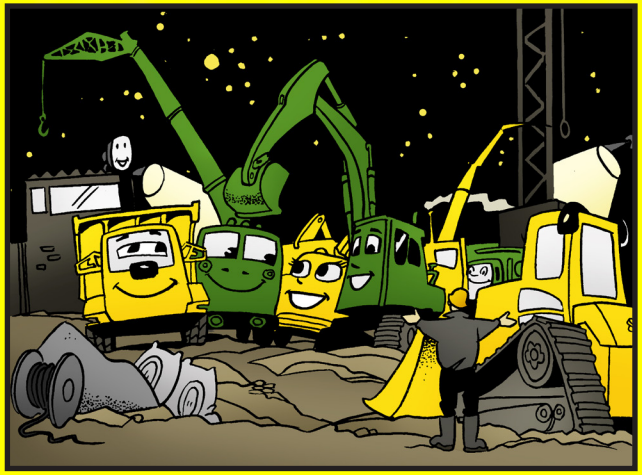
会場の みんなが 歓声を あげると、監督さんは ほっとして ため息を つきました。それから、各重機に 特別な 余分の 燃料を 入れて、お祝いを しました。その お祝いは、翌朝まで 続きました。

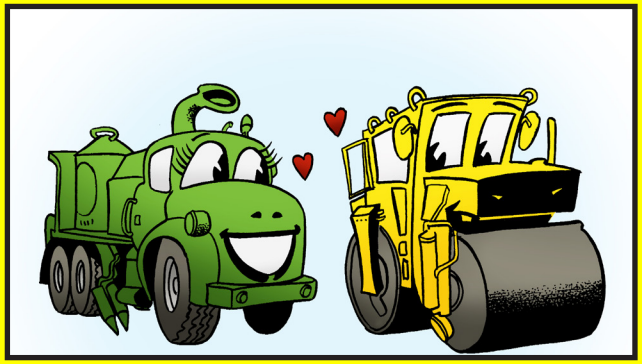
「みんな、今日は 午前中 休んで いいぞ。」と、監督さんが 言いました。ブルドーザーは 特に、休みが もらえる ことを うれしく 思いました。

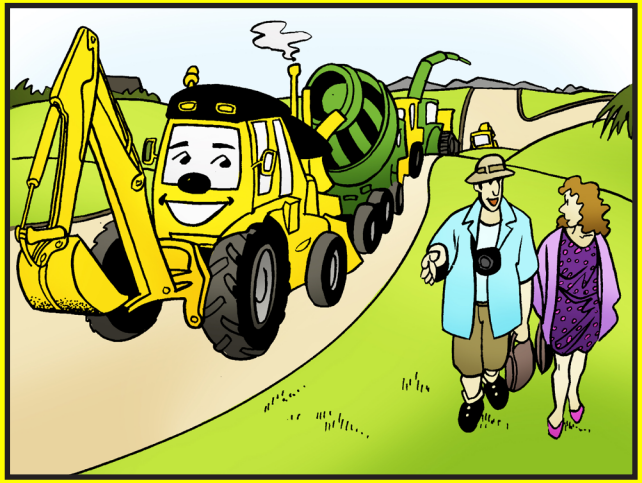
🚌🚌🚌

この お話は、ここで お終いです。ですが、積極思考建設会社の 作業現場では、その夜から、ふんいきが ガラリと 変わりました。みんな、自分の仕事に 満足していました。ただ、解体ボール氏と その 息子たちの クラッシャー君と ブレイカー君だけは、もう 仕事が なくて 現場を 去ったので、いませんでした。工事は 予定よりも 早く 完成し、監督さんは 大喜びでした。

コスタ・デル・ソル・ホテル・リゾートの オープニング日には、お客さんが 来る 前に、すべての 重機が 現場を 出なければ なりませんでした。この 長い 列の 最後に いたのは、ミニショベル君です。ちょうど ゲートを 出たところで、ミニショベル君は、最初の お客さんたちが 大声で こう 言うのを 耳に しました。「ここの 排水設備って、世界一なんだってさ！」







文：ギルバート・フェントン　絵：ジェレミー　彩色とデザイン：ロイ・エバンス
出版：マイ・ワンダー・スタジオ
Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル